

① 妹編

日曜日の朝。

スマートフォンをいじっていると、ホーム画面に「行動呼び出し」なる名前のアプリがインストールされていることに気づいた。

なんだこれ、と言いながら迂闊にタップしてみると、聞いたことのない会社のロゴに続いて禍々しい色使いのタイトル画面が表示された。フリー音源のBGMにMSゴシックで書かれた「行動呼び出しアプリ」なるそのまんまなネーミング。どこぞの学生が課題で作りましたと言われても信じてしまいそうなほど、全体的にチープな出来であった。

『この度は行動呼び出しアプリをダウンロードいただき誠にありがとうございます。本アプリはあなたの日々の生活をサポートするための、画期的なツールです』

「くそ、あいつらにスマホ貸すんじゃないかった……」

初回起動のメッセージを読みながら、昨晚のサークル飲み会での一幕を思い出し

顔をしかめる。きつと限定の十連ガチャを引いてもらっているあいだに、誰かがふざけてストアに接続しやがったのだろう。他人のスマホに勝手に変なアプリを入れるんじゃない。

ぶつぶつ文句を言いながら画面をいじくっていると、チュートリアルウィンドウが立ち上がった。それによると、何やらこのアプリでは「カメラで撮影した人物に、任意の行動を呼び出すことができる」らしい。

……どういいう意味だろう。一時流行った、○○のキャラクターに顔写真を貼り付けて踊らせるみたいなのやつか？

「うーん……？」

まあ……よくわからないが、せっかくなので試してみるか。どうせこの端末はサブ機だし、取られて困るような個人情報も入っていない。それに今日は一日暇を予定だったので、「謎のアプリをするデー」として遊んでやろうじゃないか。

「うーい」

「ん、兄貴じゃん。おはよー」

自室から一階に降りてリビングに向かうと、ちょうど妹の陶子が朝食を食べているところだった。白っぽいサテンパジャマを着て、トーストにチョコスプレッドを塗りたくっている。爆発している寝ぐせからみるに、こいつも今さっき起きたばかりのようだ。

よし、タイミング良いからこいつにアプリを使わせてもらおう。確かこいつ本名顔出しでSNSをやっていたし、いまさら知らんアプリに顔写真を取り込まれたところでダメージはあるまい。

スマホをつけてアプリを立ち上げると、まずカメラが起動した。

「あー、権限……オッケー！」

深く考えず、行動呼び出しアプリにカメラへのアクセス権限を付与してあげる。続けてポップアップした説明文を読むに、どうやらこれで撮影した人間が「行動呼び出し」の対象として保存されるらしい。

「陶子ー、ちょっとこっち見て」

「うん？」

俺はスマホを妹に向け手早くシャッターを切り、トーストに噛みつくこいつの姿を撮影した。カシャッという音とともに、陶子の顔写真がアプリの中に収められる。

「え、ちよつと何？ キモいんだけど」

妹は明らかに機嫌の悪い顔でこちらを睨みつけてくるが、無視して操作をつづける。

『対象の実行する行動を入力してください』というバーとともに、またポップアップで説明が表示される。どうやら、この画面では入力された行動と全く同じ動きをしている人間をインターネットを介して検索し、さっき保存した対象にその動きをコピーしてくれるようだ。

……全く意味がわからないが、口ぶりから察するに、例えば「五十メートル走をする小学生」と入力すると、動画サイトのそういう動画に自動的に合成されて「五十メートル走にチャレンジしている妹の動画」が生成される……とか、そういうことなのだろうか？

「いや、とりあえずやっちゃえ」

「何が？」

俺は検索バーに「立ち小便をする男児」と入力し、確定ボタンをタップした。すると、

「聞ってる？ 寝起きの女子の顔撮るとかデリカシーなさすぎ……っ!?」

さっきまで俺の悪口を言っていた妹が、突然ビクンと震える。

そのままポカンとした表情で虚空を見つめていたかと思うと、妹はダイニングチェアから弾かれるように立ち上がり、パジャマの下履きをショーツごと足首まですんと下ろした。

「うおっ!? え、おい!？」

突如始まった妹のストリップに思わず声が出る。しかし、妹はこちらに見向きもせず、自らの股間を見つめたまま、にへらとあどけない笑みを浮かべている。

テーブルの天板と股の高さが同じなせいで、マンコと陰毛がテーブルにくっついている。食卓にそよぐ陰毛ははたから見てもわかるくらいぼさぼさで、こいつが普

段から手入れを怠っているのだから、簡単には察せられた。

「ね、ねね、おかーさん、ぼくね、おしっこするから、みててね」

「はあ!？」

妹は背後を振り返ると、舌つたらずな声で誰もいない空間に話しかける。

「あ、あー……なるほど、行動呼び出すってそういうことか!? うええ、どういう構造だよ……!？」

ここでやっと、俺の理解が追い付いた。

行動呼び出しアプリは、合成や動画生成なんでもではなく、現実世界の人間に現実世界の人間の動作を呼び出すアプリだったのだ! なんとというオーバーテクノロジー……!

つまり、いまの妹には、日本のどこかにリアルタイムで存在する「立ち小便をする男児」の行動がそのままコピーされているのである。誰もいない背後に話しかけたのも、おそらく動きの元になった子どもの後ろに母親が立っていて、それに向かって話していたということだろう。

「はは、なにこれ……すご」

下半身丸出しで食卓に立つ間抜けな妹の姿を見て、思わず笑ってしまった。にわかには信じがたい光景だが、これは確かに現実だ。もしこれが俺をからかうための壮大なドッキリだったとしても、多感な年ごろの妹が俺の前でわざわざこんな恰好になるはずがない。

「……ふっ、ふうう……。ん……。んう……。ん」

しばらく茫然としていると、妹の身体が小刻みに震え始めた。あ、そうだ。こいつこれから立ちションするんだった。

「……ほらっ、ほら！　でてる……。じよろじよろ……。ん」

妹はマンコの前で何かをつまむように両手をかざすと、その場であっさりと放尿してしまった。朝イチらしいかなり黄色めなおしっこがダイニングテーブルにしょわわわ、と流れ出し、飛び散った飛沫が食いかけのトーストや麦茶の入ったコップを汚していく。当然股下にも尿は垂れ流されており、イスや床、足元に落とされた服にも盛大に染み渡っている。

「あつははっ、すげえな、マジでやってるじゃん！」

あまりの出来事の連続に笑いが止まらない。お前すっごいことしてるぞ、と声をかけてみても、妹は小便まみれになる朝食と濡れそぼったマン毛を真剣な表情で見つめ続けている。

「ん……おしっこ、ぜんぶでたあ……！」

あらかた膀胱の中身を出し切ったのか、妹はすっきりした顔で手首を上下に動かして、存在しないチンポを振った。行動元の男の子ならそれでいいのだろうが、女の身体でそれをしたところで何の意味もない。

マンコから太ももへ残尿が垂れ、とつくにびしょ濡れのパンツにしがくが落ちていく。

「……はー、マジキモいわこいつ……」

「えっ？ ああ、そっか」

妹は思い出したように毒を吐くと、小便でべたつくダイニングチェアに生尻のままぺちゃんこ座りなおした。どうやら指定の動作が終わったので、本来の妹の動き

に戻ったようである。

「……今つてもう陶子だよな？　大丈夫か？　その……水びたしで」

「は？　もう喋らないで」

妹は周囲の惨状には目もむけず、アンモニア臭い下半身を露出したまま、何事もなかったかのように自身のおしっこでひたひたになったチョコトーストをかじっている。

「なあ、そのパン何か変な味しないか？」

「ん、しないけど？　何、ひよつとして期限切れ？　これ」

「いや……なんでもない」

「……兄貴さあ、さつきからなんかヤバイよ。頭おかしいんじゃないの」

なるほど、どうやらアプリによる動作中の記憶はないようだ。しかもおしっこ濡れで朝食を続けている様子からすると、アプリで呼び出した行動にまつわることはその後も一切認識ができなくなるらしい。

……ちよつとすごすぎる。どういう仕組みか皆目見当もつかないが、これが恐ろ

しく高性能で便利な不思議アプリであることは確かである。

「ふう、ごちそうさまーっ……」

「あ、ちよっと待て」

朝のうちにもう少しアプリの効果を試してみたい。

俺はおしっこ食パンを無事完食した妹を呼び止め、検索バーに「オナニーをする成人男性」と入力した。

「もう何……うっ!？」

またさっきのように体を震わせると、妹は足首に引っ掛かっているびしょびしょの下着などをまとめて脱ぎ捨てた。尿浸しのフローリングにお尻をつけ、テーブルの下にあぐらをかいて座り込む。

「うっし……やるか」

そう言って、妹はいつのまにか持っていたスマートフォンを操作し始める。背後に回って画面を見ると、なにやらカメラロールをぐちゃぐちゃに触っているようだった。

この指の動きからするに、たぶん動作主の男がエロ動画サイトか何かを閲覧していて、そのブラウザ操作が妹のスマホでは偶然カメラロールを起動させてしまったのだろう。

妹はそれからしばらくスマホをいじっていたが、やがてテーマパークで友達らと自撮りしている画像で落ち着いたらしい。スマホを横にしてシークバーをいじるように画像の下の部分を右に擦ると、妹はニマニマ口の端を歪めながら右手を股へと運んだ。黒々した茂みの奥ではクリトリスが痛々しく勃起していて、ぷっくり膨らんだその肉芽は、必死に自分がチンポであることを主張しているように見えた。

「ふっ！ ……へへ……ぎっ!?!」

妹は充血したクリトリスを包むように手で筒を作ると、そのままかなりのスピードで腕を前後に動かし始めた。動作主はなかなかハードな男性器をお持ちのようである。

しかし、当然ながら妹にチンポなんてものはないし、どれだけ短小だったとしてもクリトリスに代理が務まるはずもない。そのため今の妹は、クリトリスを代わり

にシコつているというより、むしろグーでマンコを殴りつけているような状態になっていた。

「お、おおっほ！ ……ううう！? い、いぎいいっ…:…!」

真っ赤な顔でクリトリスをべちべち押しつぶしながら、妹は友達との自撮りをオカズにして男のオナニーを続ける。

あいつが普段どれだけオナニーしているかは知らないが、さすがにこんな強さでデリケートな部分にパンチを食らわせたことはないのだろう。もともとの動きを越えて体がガクガクに揺れているし、アプリの効果も超えて喘ぎ声が勝手に漏れ出ている。

「っふ、ふおおっ…:…ぐおおおおっ!?! ……お…:…ごおお…:…ぐう、う、うううっ!」
「お、いったか?」

待つこと数分。妹は野太い声で一段と大きなうめき声を上げると、そのままスマホを床に投げ捨て、股間の前へ左手をかざした。

さては射精したな。本来なら肉棒から出た精液をティッシュか何かでおさえてい

るのだろうか、そんな準備はもちろんない。妹は恍惚とした表情を浮かべながら、マンコから飛び出る愛液を素手で受け止めていた。

「うう……ふう、ふう……」

肩で息をしつつ、左手で股間をぬちゃつと撫でてマン汁を拭う。男の一回分の射精量ならこのぐらいで後始末はできるのだが、いかんせんさっきの雑なクリオナでめちやめちやイキまくっていたので、未だに妹の股はどろどろのままである。

「こりやもう一発抜けるな……じ、じゃあ……ウチは、部屋行ってるから……はあ、はあ……。あ、兄貴、洗い物、やつといてよ……ううっ」

誰とも知らない男のオナニーを終わらせ、元の陶子に戻ったようだ。

妹は愛液のこびりついた手でスマホをにやりと掴むと、かくかく震える下半身を無理やり動かして自分の部屋へと這っていった。